風雅でなし
忠臣
一力
祇園
曙
直と呼ぶ。ただ、此方は此方の義をなす。

「此方は此方の義をなす。」

「此方は此方の義をなす。」
つれもは此所を退へ。
只幾重に師直殿明日の義を、
へてとくこざる。魚心あれれば水心有りや、
此義は中さく共御承知でござらむ。ム、ハ、は、と回し
て幽居を得る。盛の花時あれば、
散るとは白髪の師直に、互に式箇諸大名表をさして
出で行も、

桜

の

馬

場

地

限り桜花に。願はる。建長寺の桜の馬場。
一日ちちともに咲けり。散る始の風色は。絶景いはん方もなし。
地鞭打が、家来早野勘平。儒酸風のやさき豊色のうしの所の麻上下。家来に持つ豪物。フシづくと出来り。何ノノン、

判官様は、御大切なる役目。それ故師直に取入事は取つたが、サテこちらが難題。おかるには嘆して置かれた。もふれて

うな物じやが。地待人よりも待つ。身のぎとくぼうし。後帯立ちある。携へ持し文箱より。逢た見たさにフシじょこく

て居やしゃんせふと。心はせいても女の足。フ、そぶで有る。

つくりと此文箱に。認めて持て来はは、けん分奥様の御手に似る様と思へ共。地根が拙い筆事故。それにまだ奥様

は彼師直に。添削の短冊。自が手で書も読らばし、とな代筆に認めてたもとの御意。新古今の歌とおしづつ

た通り書ましたのが。それにお文大事有まいかなア。何ノノン、大事ないか？短尺の歌も。此返事も。そなたの手あつち

は知ぬ。つばりかはよきや、といふて悦はばい。何し角もげみを奥様に仕立てるおれが魂贈り。地手を引き合て若き同士。伴ひ

フス行とせる所
平。高家の師直様にお目見え致し。お詞を下されし段。誠に有難い仕合。ハ、サ、くそ思ふが身の実加。神仏を拜
まんよりおらが主人を慕むかよいはさ。堅ぶ見へても物らかな主儀師直。お額なされた。かはご殿の色よい返事は
取持致さて何と致しませぬ。殊に此度。お勤使御下向に付。謹厳司の役目を謹る駕治判官。何かお差出。立ふと
伏ふと師直公次第なれば。此度の役儀を。東角首尾よ。其はりかほよ御前の色よい返事は袖者が胸。ハテ渡てそ
れは身共を疎し見ぬ恋にあこがれし主儀師直。貴殿の勤にて懸が叶ふ御願仰。判官殿の首尾は上首尾、気道ひ
召さる為も伊尾野氏。言つおかるか形そぶり。見る目も怒からり可。細目を成。詞イナヘ勘破。アノ女は
何者でござる。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらぬ。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかるとな。おかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかかる。かかる、かれ
は申さらん。ハテ渡てかかると申てはまらない。イナあの女かはよ御前の召遺ひかかると申て大儀才。アノおかかる。かかる、かれ
は申さら


と悪い。ずつと確かに寄たく。大分合はよいぞ。やよい。ハッ動きしめこの鬼。時におかる。あ

いつが事はマホつて置いて。今の事はよいぞ。そしてたものならなければそざ。そりゃもお前、お執念で、どんな事でもをするけれど。かほよ様には地から座るの大師直。かはりに成て立つあぶた。鴨やらしい事をさせか。

何とネ其時はよいかげん。口先で語っておきや。何をするも此度。御主人のお役目、どぶ首尾よぶ。サアそりや心得て居るはいな。其かはり言替した事態平様。必違へて下さんす。何の違よ。侍実理。未来返も。女夫に成

かたはむっくりやっと。退籍足付対仮名内。是さあわ裏に入りて乙哩、勘平はつとそしる顔。間際内殿御用。

フジかはず共の風情。地見より。フシ、アノ嬉してもさるますかへ。イチありや斯くやなりますね。何の違さ。侍実理。未来返も。女夫に成

かたはむっくりやっと。退籍足付対仮名内。是さあわ裏に入りて乙哩、勘平はつとそしる顔。間際内殿御用。

フジかはず共の風情。地見より。フシ、アノ嬉してもさるますかへ。イチありや斯くやなりますね。何の違さ。侍実理。未来返も。女夫に成
つかりよ見アイタッく、コリヤ何で打鬪する。ソア。是は其様に腹立てる事はないでない様な絆めく。テモ諸侍
のあたまを。サア色仕事といふものは。それはてはいかぬ。色仕事といふもののは。常住居いふものに合たり。又はあたま
を飾かれた。既にもっておふさ徳兵衛。ソノ又はおはつ徳兵衛。そのでも色仕仕の親玉なるて前もおかるに惚て
るは。勿論えや。あいつもお前前に惚てゐるは勿論えや。所に急にいくと貪惜みてつぶといる。勿論えや。そこを
腹を立てたたかれてゐる。いくらはさされても。じつと辛抱さへすれば此戀は叶ふ成程。只今貴殿のおもしりにより。此
腹は打たれてたかれたと。何でも恋さへ叶へば。どの様な事でも辛抱するは。するか。驚伴悟りひらけたり。何で
も恋さへ叶へば。どの様な事でも辛抱するは。するか。

つかどもこも成ぬよサアく、其気なら。もふ氣道ひなしや。真にくどいた。ラットよしゅく。歓呼よしもし
てもだんないく、大事ないと。地餘打けを突とばし。勘平の手を取ってアガさんせと引へられ。伴内は取ちがへ
てはしたり伴内様、ソア早ふくと地道立ちられ、色サアく、行はいよいよ、え、よい事になす。伴内様
の拝は大かたに。此返事のことで有ふ。ソレさへおかるが事をと道言ふを言べす奴も。ソレ引立く。入れ
り。地餘打けをいはやけ、子。よい事をはし常善尺巻、邪魔のない内。サア早ぶ。

地餘非にくと引立ちら。下地はすきなり御意。はよし打連れてこそ。三要急さ行
歌吹折て、人に見せなはる桜はな。フサ寄に治れる君が代や。建長寺の庭の面。盛り満紅花の顔諸侯の奥方女房達。

方

鏡々桜の折枝に結び付る三十文字。フサ寄り葉も繰知させた。

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我おう様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗った是。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗った是。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗った是。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗った是。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗った是。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗ったは。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌

我君様は此建長寺へお来。我様をお召に乗った是。例年の通り都より御勧使様の御下向にて。諸大名の奥方より和歌
し給きて。初心にこぞりすれば宜し。イヤカラ。歌は中々面白けられ。腰のてにはは今少し。斯なされば春秋を
ひとつ見ばやを巡らなれ。春晴の。既はげをぞと聴ぬればよいではないか。都で歌といふ物は。詠人の心につれ
ば、一人可愛らしい魔方を。地頭つれくと打守り。詞と在分には身が館へこさけ。歌の詠かた心を数えてしん
ざ。ナ、承知されば両共下らゆる。地破りと計に懸懸に。二人はフシ其座を立て行。詞細川の妹名は。中々を
に、手づからしついて。にたく笑ひ。詞コリャいませ。いかふ御念に入らぬ。命をも遺す言、色なる扇箱さし置品を。一々
に。先刻より前観致した。が中々お二人共秀才。添削には及ばぬ。此德上僕扱いづれも古への伊勢小町もお二
人には及ばまいと。地めれたやたらに響るも一種。二人の納言を見合してフシ目引袖引立帰る。詞寺に杜若花がやめ。

好きいやなり。紫の。かほの前と夕へし。地橋姿しややかに遙かたに畏まる。武蔵守は摂へと。詞こ
たたは眉をこぞりて。フシ目引袖引立帰る。詞寺に杜若花がやめ。
 Cavaliers and their retainers are beautiful, so it seems to be
no harm to see them. I do not know how many people there are.

To the contrary, one cannot read their intentions, it seems.

I have heard that the baseness of the samurai is not
enough. The ancient sages, even if they were to read the
Chinese classics, are praised for their wisdom.

The samurai and the courtiers are the same, and the
samurai who are not well educated are not to be trusted.

Therefore, I must be careful when dealing with them.

I have heard that the samurai are to be trusted,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are treacherous,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are honest,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are kind,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are cruel,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are weak,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are strong,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are wise,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are foolish,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are learned,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are ignorant,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are courageous,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are cowardly,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are brave,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are timid,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are fierce,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are gentle,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are harsh,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are kind,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are cruel,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are gentle,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are fierce,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are kind,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are cruel,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are gentle,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are fierce,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are kind,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are cruel,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are gentle,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are fierce,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are kind,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are cruel,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are gentle,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are fierce,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are kind,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are cruel,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are gentle,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are fierce,
but I do not believe it.

I have heard that the samurai are kind,
but I do not believe it.
鎌倉御所

四ツの海島に生じて、フシ草木も立ちく歩く鎌倉御所。
此座使の下向によって、定まる式礼を着て、栄臨過ごし、御座に尿をねらうと
るよりは執筆師直権柄に顕はして薬師寺諸出米り。

薬師堂の多々も今日は多く故御挨拶も申さぬ、最早お勅使も
入有て記許せざる。而も執事の挨拶石堂諸出米り。

早にお入にて混雑と承りましたら、事態でござる。故元なればイマ
左様でもござるが、今朝は別して御審査、殊にお勅使にいつもより
してござるます。若出かしひやつ。阿、同じ挨拶の役目で笑止千萬。

群雑の面々に御座召されたに、肝心の箇盛司が遅滞とは。イマ
薬師寺を捨て置つしまれ、何と云ふ家筋か

薬師堂は、役目疏略て無気の汚。其くせ常から財用有願。じたい我僕が過中すと。地人営ににも相口同士

地溝を見るより大いに驚き。調は高の殿石堂殿と

地知らす判官高定。執事の室間の長下、

は早いお出仕。故今登城の既り、

調は高の殿石堂殿と

地知らす判官高定。同じ役目を申ながら。

早く。地

と石堂に。フシ気を付されれて、走り入る。師直はそらぬ顔。調

薬師寺殿。判官殿が出仕召され

ざるか。早く。地

と石堂に。
じゃござらぬか。左様く。只今是参られたが、何やら周章で立れしや。どれへござるの判官殿。判官殿と呼ばれ。ハッく。

もと計籍の細。結びながらに取取す。出来る鹽治をじろりと見やり。判官殿。こ

なた今日の饗応司。何と心得てござる。ハッく。

イヤ。今日は大切な式と昨日も申渡したに何故登城でなく召すの。

じゃこた。雪狐追出しの様に。今頃のふくと顔の皮厚くよく出仕召したの。イヤ。

かたなり中はノ cioo。何角お尋ね申し度。夜前貴殿の館へ趣きし所御面前下されず叉今朝コレサ。

またしやく。イヤ。全く以て某。アコレく鹽治殿。貴殿催請の越度。申譜に及ばぬ。地お詫なされと石

堂が。おもしに成たる此場の押へ無念ながらも判官は、フシ真平御免と平伏す。

御御覧なされ師直殿判官殿が不調法を

かへりて。アレあの如くお詫申しらば御可簡なされ何角のお差違を。イヤく。石堂殿某率も御意願はござら

ぬ畢竟今之様に申す。役目を大切に存ずるから。此上は何角差違を仕ふと。

嶋はへとけし此場の饗応司の胸

も広書院。奥は謫の詳高く。

彼疲れ花の憂にお式部が敵戦に迎える。方史之室に入見へ夢は憂にけり見し夢はさへ

て失けり。問アリやもふ東北の切。次能は春日謁神。祝言経らば饗応の配膳。鹽治殿造井殿さ、い、用意さしあ

てお館も納れば。興配膳の創陥相鹽治殿はいれにござる。判官殿く。

鹽治殿と高らかに呼はる酪。ハッく。

判官高定。次の

間より走り出。問コレハく。桃井殿早早饗応の創陥でござるかな。左様でございますの祝言も納れば配膳の創陥。
意はな。デモ某へは執事より何の差出もなく、殊に見ますれば貴殿のお料理は七十五三ムや同じ好謗の役目をたる此方へは、三汁十一菜陸鴨肝鰤のヘテハ、心得で従う判官がなし當たる曹懐の折しも、奥より追々に、附名様の五漢はついて、見ますど判官がと、地少ず早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。判ア、コレ、懐治殿に構はず貴殿は早く、いよと申し。ハテ刻限が延引致す早ふ。地くとロッパ、言話し非しく桜の井は、フシ心を残して打通る。
やまずいてな嘲啇い。何回、判官無念さ奇怪さ。扱に我に耽磨を興へ科に落さんもかと。重の無念をイやく。

現此度を讃っては家の大事、身の大事と。違立腕を描鉄し、風イウナにずれも御覽の通り師直公の御機嫌を計け、前後を忙ざる判官が一生懸命策の所を御断箇さされ師直殿へお取次。コレなえずれも師直殿へお取次。科殿山名殿一等殿。師直殿、宜しくお取次をはさく。師直殿最期、観態、副帳の従と伴を師直殿へお取次。科殿山名殿一等殿。師直殿、宜しくお取次をはさく。師直殿最期、観態、副帳の従と伴を師直殿へお取次。
地をゆるく共。よもや動がし越と。其大石の底深き。光りを包む大星氏。鎌倉の騒動間へしより域内へ相請て。日夜の

評議府主居には女房（お姫様）小浪。在家の落葉松閣の。そと計の皆信も、フラシ胸打標倉計なり。在當家の譜代お姫

にお石はしとやかに。何をされていの。心々なるといふ。何をててキス騒動間を。してつぶやいはしなさ

さず見合ってござるには。深い御子篤けふは大失帳して。処死になるか篤城か。いづれ果敢ない身の許り願ふで

列に加わらんと登城した弾力倉。今年は明て十六なれど。近年弾力倉純身にて御入部なさき》，御目見へもまた等閑の

部屋住ながる。地生るも死るも一統と。覚悟しての今日の出席。道へ武士の胤ぞや。此子ながらも立派さを。響る

は親のフシ亜かや。地小浪は始終聞ひより。案じ重ねて申母様。問殉死とやらに成すと。お姫様も力弾様も。最

せお殺さなされてよい物か。地遠のたと力弾の言は勿体なくも弾力倉より。お姫様にての事なれど。間はまや兩方共若

に言ひ下さいば。お国事さき。地為さき。外に事となる。
図画紙力臣思

は道理。此方は部屋住の身の悲しさは、是非もないやや親人近。地絵れよと有御趍。すうく列座を促立ら。
「先生、今日はお前の分だけ特別な物語を読ませてもらうよ。」「はい、お楽しみに。」

「昔、ある村に住んでいた chaired と呼ばれた老人がいた。彼は村に住む人々に対して、物語を口ずさんでくれるよう頼まれた。」

「初めに、村の子どもたちに物語を教えた。彼は物語を通じて、物語の中で描かれた力や勇気を伝え、人々に希望を持たせることに成功した。」

「その後、村の大人たちに物語を伝えるようになった。彼は物語を通じて、物語の中で描かれた知識や教訓を伝え、人々に学びを持たせることに成功した。」

「とうとう、村の全員に物語を伝えるようになった。彼は物語を通じて、物語の中で描かれた愛や友情を伝え、人々に暖をもたらすことにも成功した。」

「彼の物語を通じて、村の全員が物語の中で描かれた力や知識、力や友情を学び、自身の生活を豊かにすることが成功した。」

「これらの物語は、今も村の子どもたちに物語を教えることを継続している。」
事を、女房が知って済ましかた、言葉の名を記した死言はせぬけれど、とうから女房とも思って居るのに。殿様せぬが仕方なし、女房も思って居るよ。秋風が吹くとな、女房は寒いと云ふ、女房に言ふのは、私計か及びない。竹の園生の御身でも、たとへ月の宵に住む、観音様の女でも、切腹とは、いやや、わしゃ否じゃ、いや nodo と。一筋に懸を立てる娘今は、真実見へてフシ不可示さるか、地さ、この力発は更に、無理の道理に詰方なくって、さすらぬ考えて居る折から、親しく居るお顔と、地さ、言及に眉をひそめる、いかなる子細、地さ、諸共案じ危ぶみ、フシ問くの、詞イヤ（殉死などとは思ひも寄ず、とは又、なれば、サレサの如く、見合して、湊と共に傍に誇容、詞由良之助殿、お前には、此度殿の御書御意によは、焦らず、御用金を配分しな、命全、彼時節を待つと、殉死と、のめり居るは、伊勢可視、見せざるは、勇なしと言はず。五百も昔の事、妻は安楽に従なのが當世と、地さ、比方徴し居るは、殿、殉死に似合いうが、父、正しく諸士の物笑、思へば無念さ奇霊、親子は、顏の知、現を絵は、お家の人を御観、彼が、地さ、著との、妻をお親しに遊ばざるか、妻子、珍貴及び、無位善者、の障りを覲べ、正しく、示し置く。
地我々不便と思し召さば、妻子を捨て忠義をば、一団に立て下さるが。誠のに悲悲、お前を待つもー、聞くか、聞かにてて、親人とい
る心をとくし身を鰐し。矢倉をとくし諫める。地答ならぬれば思案を極め。物をも言ず聴出す力弾。母は擁抱し、
からかてコリヤかこへ。イササ親人は聡明である。此力弾は武士の性根形かしも目にはかけまさらさらと。地としめ母を
振ばり、又かへ出すを呼留め。地コリヤ待て力弾。ハア親人おとをめならされしも。地話ねに大星すんと立。有合矢
緒る二人を。抜ぎ退けく扇を持て丁々。父の機嫌を計り兼懐騒力弾つたと睨み。地狼藉者真方生れ付て人に勝
れ力を軽み、錆倉へ騒行直喰ふとも。只今折し彼一筋の矢の如く。経は命を失はんか又通り一致になさばと
へ大力の其方たり共。容易に折り得ぬ矢の此矢心はいか程はる共。切て放すはあぶない。スリャ親人の御本心
は金配して身を防ぐ。親に付は徑の道アレあの如く松が枝に巢くし蜂よや手本。我子を朝幕育ちに、何我似
因を一時に見るやが運ぶ。彼二人来れど。地大星は。お石小路を引連て。しぶりに、フサ奥へ入仮隠。うつろひ
渡る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
現照。此心をとるくと思案を致せ。解権次第親人の隣切。未来永々観当するが。親子の心が一
致ばし。本心を出して吳ふ。ハッ兩人来れと。地大星は。お石小路を引連て。しぶりに、フサ奥へ入仮隠。うつろひ
描る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得しながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
遮る蜂の巢を。地力弾きと打なかめ。地狼藉者の周茂叔は。泥中に得ながら清らかに吹く運を愛す。又日の本の傍正
川
狩
此處より三十年以前の時
歌君はつれなや。胡麻がら erf て。屍戸のかけがね。ばして待と。忍ぶあふ潤をださされた。お、だまれさせた。証先の御快り。晴れなと
思ふ所存はなか。地へと一度に立出した。思へば無念とお城の方振りり方。はたと白眼て

現と。想いやるあたりに大手の御殿様に亡君の在がき本城も。今を限りと思ふにぞ名残惜げに打見やれば。城内
りげる。其気色ヲとや言ふるやらん。地中にかさ取民之丞。

因りてヲ、子供が打群て、小川の魚を一同に追追いし。

罪を執い、後の世を忘れ果たし、フシ面白ざし、風模

信じる。其気色ヲとや言ふるやらん。地中にかさ取民之丞。

因りてヲ、子供が打群て、小川の魚を一同に追追いし。

罪を執い、後の世を忘れ果たし、フシ面白ざし、風模
民之丞。有合戦軍迫取て平吉が陥際、打ば流る血沢に痛り。 調コリヤ又餘まり、餘まりとは何かあら、懸着

【補注】

民之丞。有合戦軍迫取て平吉が陥際、打ば流る血沢に痛り。 調コリヤ又餘まり、餘まりとは何かあら、懸着
宮内

騰門をさして三度帰りる

屋舎

地物がたき。フシ武家の家風も。高壇造り。伯州築治の国家老大屋宮内は一樓へ。掃除の役はお仕着せの奴が切水

内

水鏡が有るか。則も居間。乙、左様ならば。地門内へ。進むを抑留。コリヤ人。腹若且那のござる所は。此門をば進む。右手をすと行と廻り樫が有るは。

鋪

事じゃない。後に廻りと出て来い。地へは平吉詞を工ず。間夫でも昨日お約束中で。腰霊で居ても大事ない。起

て早々出掛けて来たか。ソレハそふよ。シテ親仁は内に居るか。アイン。エ、此奴何と言つても。アイン。イアイン。イアイン内は居るまいか。與一兵衛は

とばして門内へ。忍び込共知る故。詞コリヤ人平吉よ。アインと地帳子まばゆき風情なり。詞何と

とどれて。地門内へ。忍び込共知る故。詞コリヤ人平吉よ。エ、どなたもはへ出はないにし。つがめな

し摺つ。悔いをさせおった。コリヤ平吉よ。アイン

此奴どこへか行おった。鬢くいそらした角助を深い所へやりお
足様側へ。そうと遺済は思い。暇け内にフッシャ！

そこで立ちました。詞 valore は全く、

「よし、そして下し。」

なにと聞き。見物力通す手水鉢を忍んでフッシハる。

民之丞が目が生まれた。手水を詰む水を知った。

「小三郎。障子細目になされぬ。」

と一人言。念力通す手水鉢を許さぬ。

「小三郎、お早う御稽古されぬ。」

弟が弟小三郎、障子細目になされむ。はっ。

部書はして置いてました。今朝兄様は手水鉢を忍んでフッシハる。

乃手水を興しておおう。

「小三郎。お早う御稽古されぬ。

手水を詰む水を知った。手水を詰む水を知った。

「小三郎、障子細目になされむ。」

と一人言。念力通す手水鉢を許さぬ。

「小三郎、お早う御稽古されぬ。

手水を詰む水を知った。手水を詰む水を知った。

「小三郎、障子細目になされむ。」

と一人言。念力通す手水鉢を許さぬ。
若はひつて御詔で仕立てても有っては、此大星の家の様と御仏もおっねえされず。正直の指がきたない逆切て捗られ
中へ、のッ子供が一慣に。国民之丞様等屋へお出さんされぬかへと、地之上なぶ敵に、は止またり。友達達や誇りに見えた
のに民之丞はまだ起らぬ。コレepoch。なたが介名へお進ししておじゃと。地詫に皆々打連立一間へこそ入け
り。地詫に民之丞はまだ笑顔にして。調お前方待遠に有うが民之丞が朝賀支度の間次のに待合申し下されと。言々皆々左
様なら。暫く次に待まさせようと打連てこそ入けり。よき侍は風流も、フ希好も燕居の。一間なる。風前かき独
服に。閑を楽しむ主の宮内。茶事より外は念念なし。地詫からフ希好庭さはがしく。はつし」と打合ふ音。何事や
ならと打見やる庭先植込用なになく打連平吉民之丞。請太刀がらやれ待て平吉何故の此狼籍。マア何故とは比興であ
らぶ。昨曰川原の悪口難言忘れせまひと、猛烈しくも付入る平吉詫方なく火花を、ちろす二人の有様よく見るより宮内
は抜きそこ。打合ふ物遣うせじと。有合方讓取て、歌其船軍今は早々。開問い合わせたる戦にかへる生涯の。海山一同に騒動し
て。船より手の先民之丞。切込られてたちゝゝゝ。母は見るより悲しみの。心あそれと詫し方涙。コレepoch。油断仕
やんな民之丞。負くれなも身は叶はず。詩の助太刀あられ母。父は横は詫のせれ居る瞬間の心と開えは。浦風ありゝる高松の
春の夜の浪より明て。敵と見へははるれ居る瞬間の心と開えは。浦風ありゝる高松の
がさの平吉は民之丞をまくり立馬手の腕を打連すわつと一撃ぎりの内。平吉葵さず乗かゝり民之丞さええたかと
あぐらと華八倒。見る母親はいきかねつつ計に伏すも。勝負を見届けか一兵衛。つゝと寄て手を引へ。
かくれば平吉は、つとあたり笑うて怒れぬ。心の程こそ遇し気跡な Yale にて女房が我子の姿見るより。狂気の如くかげへ
け込んで、ヤイくく、間平吉には何奈何者が縛かれたヤイくく申し囹。宮内様平吉は何の家で阿ノこち
出る事はない。もつㄚで居らぶて地方かれ怒し傷に。諏コ宮兵衛殿、次様はナア気が道はせぬかの
ふ、夕夜著度で宮へ上らしやんしたによつて。今朝は大空からふと、又お前が戻らしやんしたらふくくく
呼て来て置ませふと、そこち近所をうろろ巡る内。誰言共なる民之丞権と平吉か。此お屋敷で喧嘩
と人の沙汰。

つけらを御観の體差へて見廻る内とふくく民之丞権を仕留おった々、出かしこったといふに言ふ御家亡大星様
の御子息民之丞権を手にかけたね。此親が縛かたは上へ露白無得心的能念なといふ方よりは、縛をかけて渡す
おれが心。ハテどう様に有ふと思はるるぞや。道理てござんす。

おれが承れぬ。今と様に言わす通り。昔噂の様子を早ぶ言や。其様子に寄てそたの命。助かる筋の有まい

レのふ是平吉。今と様の言はす通り。共噂の様子を早ぶ言や。其様子に寄てそたの命。助かる筋の有まい

物でなぬ。又そたもよくくの事でなれべ。アノ民之丞様を打策しも仕やるまい。大々々々ちが悪かろう

のと。隠れ出せりはくをきき泣。地平吉淚の顔を上げ

 Ihara waga みが悪からふれに。マア其様子をとふ様にもかゝ。様にもいふて閉しや。ヤ。ヤ。コレ為言て閉しでたまいか

人を殺して助かる筋はございませぬ。意

恨の様子は宮内様へ直々に。申上たふござります。どふぞお願ひ申て下されと。遭未練にござらすかゝ。様

し仏の様子は宮内様へ直接に。申上たふござります。どふぞお願ひ申て下されと。遭未練にござらすかゝ。様

人を殺して助かる筋はございませぬ。意

星宮内が統領民之丞が敵。自が手にかくる。憎むせとすゞんと立。遭未練にござらすかゝ。様

はが従へ居られた。お放しなされて下さりませ。ヤサお身も武士の妻でないか。立極で見苦しい。一

家中の上に立。諸事を取さば大星宮内。いかに我の敵なれば速。子細を紛さず取計らひ成つか。少なからせられ

つと。コレ待て戸ゆら。何事も皆某が胸に存るへて思い出、

星宮内が統領民之丞が敵。自が手にかくる。憎むせとすゞんと立。遭未練にござらすかゝ。様

人を殺して助かる筋はございませぬ。意

家の上に立。諸事を取さば大星宮内。いかに我の敵なれば速。子細を紛さず取計らひ成つか。少なからせられ

つと。コレ待て戸ゆら。何事も皆某が胸に存るへて思い出、

星宮内が統領民之丞が敵。自が手にかくる。憎むせとすゞんと立。遭未練にござらすかゝ。様

人を殺して助かる筋はございませぬ。意

家中の上に立。諸事を取さば大星宮内。いかに我の敵なれば速。子細を紛さず取計らひ成つか。少なからせられ

つと。コレ待て戸ゆら。何事も皆某が胸に存るへて思い出、
はどづく親尾一兵衛に。おまとうこりさずませ様ように。私を御存分になされて下さらませ。こと、地母いの麗にただつるも、

帰。悩んだら思ひ泣き宮内つっく。平吉が、顔打つながる。調ら、民之丞様を手にかける。所詮助からぬ私が命、此上

の住居には、親尾一兵衛お嘆みのない様に、私を御存分になされて下されたいとは、年も行ぬ形をしてして。へたくこと、

よい。身が御存分にする覚えせよ。母へ共立ち共卑せぬ平吉。

命領まつ夫の魂。話ヤア誰か有る。民之丞が死

際に多る母親突銃退。平吉を引立ててうめ。の。フラ間に入れれば戸やも、フラついてて立行つ。首筋取て親

一兵衛コリヤ待て女房。話そちが未練を働くと。絵計か此親一兵衛はかれる。

地ノ母は有も如有れぬ思

水の泡消しはかならない。此成行。いかに武士の習ひや。関西の常に引かけて親に難儀のかられぬ様おくひ申上ますと。立

なれ無傷心三鬼が七鬼が heeftて泣かれておれられ。この様こそ足軽ナラ人にすぐれて通る。立身して見せふと。地思ふた

思はず。成人に化しておれられ。この様こそ足軽ナラ人にすぐれて通る。立身して見せふと。地思ふた

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

派にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

派にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目に入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目を入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方。

にふた鬼が、目入れと此胸が裂るはいのと伏されば、フラ思ひ。はかさ余怒なり。地かいる。フラ思ひの奥の方.
と抱付。將與一兵備目をしばたとき。問ハア、誠に後悔先に立ずとやら。七年餘的絶密は、山も上らぬ重い大役。い
つその時死たらば。今の思いは有まいと。地獄の鶴は、 жизれない在り。問コレ平吉。こんな事なら昨日野川で逢た時を
がみの歴史の時。マアどぶ仕やったと問ふたらば。アノあの川の端で轉ましたと。隠してたもった差行か。地今では
けつ悔しと我の。フシ死骸を取付べ。見れば見る程平吉ならず。問コレこちの人。此死骸見やしやんせ。ナ
死骸がどぶした何としたと。地立寄てよく、見れば。問ヤアこりや平吉ならぬ民之丞殿。エ、と地驚く間よ
り。問ほ、其子細宮内が申聞さんと。地障子擁明立出る。始にかはべ平吉。ヤア、まだ生で居てたまだかいのか。コリャ
を引立出え。顔見て懐る夫婦が仰天。富宮内様、そら達が従平吉は、身手にかけて其死骸。エ。エ、是成は、某が従民之丞。今日只今より養育して。
二人相言。そら達が従平吉は、身手にかけて其死骸。エ、そらならありたまも。フ、得心でてぶつなろか。親に難儀のか、俺様に。こ
家に鷙木を大星が。家名を吹す忠臣の嫌。そらなら従平吉を。コレ、大星宮内が世縁をとらへ我子と。必願相言
さ。民之丞が不行跡あまふ育てた私が誤り。武藤馬箒は見向くもぬ不所存者と思ふても。猶、内気な子が可愛いと女
を縁に結べ共。平吉と民之丞は。瓦に黄金を替す道理。あの様な智恵の有る。地子を設けたと思ぼの。こんな嬉し
ない事はないだ。いそく勇む奥方に、お種が嬉しさ手を合わせ。問エ、奥様の添ない。お種を替す道理。あの様な智恵
の有がたより。手の舞う様手の踏戸なし。地奥方は差寄で。問イア申し。あの子を民之丞と呼むするも。どふやら
誰有るかの。手の舞う様手の踏戸なし。地奥方は差寄で。問イア申し。あの子を民之丞と呼むするも。どふやら
所存者の名もてございす。ムウ成程私の願い。其方が男のやる文字を取れ。戸ゆら戸ゆら由良之丞でも有るまい。イハ
申し。私を助けてくれますといふ心で。由良之助とはどぶてございませぬ。待やれ大星由良之助。ソレ申し。よい
名をこぎやますぞ。いかにもコリヤかろうか。然らば今日はより。大星由良之助義金と改め。鹽治家二代の忠臣。後年

神風が龜井へふれて行。芝居の太鼓。朝として、弾三味線の。

此所一葉貯蔵あり。 }

繊

手

【此所一葉貯蔵あり。】
観山。イナコレく、そふいぶ心で有ふとは。是ぞし知れぬ中なれば。うかまれ物幸迎は。

「オホン、ホレく、そふいぶ心で有ふ」と。何れも法師が三十人。鸞子はしかる計点。上百におげんに。何れも長く三島に八重野にお箱に小鳥にお信心にお真に、おづらにコレく、三十三間堂の佛、数間ふて居る間に。何れも長く夜でつも、更に。増しの内にとぞれき、飛し我家族々へ立帰る。雕様子とくより來かかつて。立開両歩み出て。闇太夫様。出圗、由良之助、かくの紫りアイラいつ、狂気の次也。方よりは、蓬の内にとぞれき、飛し我家族々へ立帰る。雕様子とくより來かかつて。立開両歩み

色水は、夜の帳や四條遊、妖背を結ぶ、フェリグ、繪手船。地かかるが母が梅子を、育ちにおいての見軒く。手を引続し、寺岡

力 表

平右衛門門に、シイコリヤ婆、途中、事々の前様、を見る如く、番手通りを横切る。三箇町へと、三箇急急行く。
かかる今は夏雲とかいう憂きの煖行燈。火がけにと、あはっ様じゃないかい。あ、おかる。昔の事もないか。あ、イヨコレ喜助殿。お前は八百ヶくらいの仲居衆に、今の事頼んで、一力、おいて下さんぜ。わしもそこへと地人を除く。

マア、かっ様。お前も御無事で。お喜しいございます。マ、無事では無事ながソノ、おかる。勿平殿との中の此子、生れ落としの二親の手を放れ。此ばがあっそらつと貴か乳で、育てたたり。地又してはそなたを尋るいらしぃにやる。やせ百姓の悲しき。

そなたに迄御奉公すすと思や。マア、かっ様。おふおじやつたの。ちっとの間見ぬ内、テモ太ふうと、ドレ三治郎こうちへおじやと。地抱取つよりは手持つ月。手持といふに更科や。おば捨家の名月にふるは畏や夏雲の。マア、晴れ思いずわりけら。地マア、久し振て逢て嬉しい。わしはそなたは案じずとよいはい。

やそくと。メ六條さして別れ行。地女郎も食ず酒呑す。忠義に通ぶ祇園町。いきまやか、四合板へ、手持つ月。手とを手に、三治抱取つ。うるせえ事、有るか。

地平右衛門、前総廻を現し。地シテ由良之助様は、地女郎も食ず酒呑す。忠義に通ぶ祇園町。いきまやか、四合板へ、手持つ月。手とを手に、三治抱取つ。うるせえ事、有るか。
は私なり身の上を勤めし、殿に思いはされ、深くもふれた中なると、世話にもこころう。何等の書をこらせば、私をはたはと、となかじやと師直をだまさせは、

故に大の御難義。後をかえっては、故・殿の殿様。何卒お手に一の功立よる御恩を、親もと仰せも、かつて。

之見風の呼をし、戦の玉手箱、かけが、

出兵労歩みを、之を進、御手洗い、目まざし仕かたて静なる、遠かに、跡についいて平右衛門。入とをするを。

大の於の、従、土御門にとつ。しよるげるに付入。

毎日々催促され、動の尤幸のと引き付ける。大かた刀を慧で仕進。金は柄てくすねたな。

成程。御臨に延引成さすも有ようは此刀。おらに所望させて貰ひたさ。ヤア、大切なる事をまさ出した。ガわマヤ頑とした割引せぬか。

アツマはサア。アツマヤ、コリヤ泥坊ふとじゃや。

切ても見とふと思ふか。

コリヤ何じゃや。わかりば、切か。イヤ全く。

アヤ、コリヤ何じゃや。わかりば、切か。イヤ全く。

コリヤ面白いう。サア切れ。

サアお切。

サアお切。

サアお切。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られ。

切られる。
コレ亜相あたたし此方のお客じゃはいた。イヤ！苦しゅないね！めったに知る顔でもない時。ア、どうやる！

た様な顔じゃがあ、聞きたんのはどうぶつやぞ。ア、知れたから、由良殿じゃの。さらば面ない千鳥を取って御挨拶る。

良め。斧め。コレラ喰せらるはい。ヤニ由良殿。途中がるか。や途中とは。ハテ徒党の人數が掴めましたか。イや

三代相恩の主力の仇を。成程仇には存ぜぬ。鹽治殿が短気を出して鎌の舞をやられたらこそ。我々此様に耽楽を仕

める。国に安穏でおったらば。一生此様に繋絡の腳布の味をしらず。死おがなからいふと思へば。主人の大

恩忘れるな。口に諸の不浄を言へ共心に諸の不浄を言う。大丈夫の魂を、遠々、イマく大丈夫と言れて病

い腹切ふより。根名を覚えておき大脅を自由にするが當世く。ホンーマ厳々から海雲が見ぬ。何處へ行た。海

雲様は旋の力でて。実はむし癖を。_war=バム、大星。ハテくつぎと鼻へこのよりの。ア手帳案。}

則で彼取直ず鹽治殿が蝦になされた。ア
は思いれば勿体なたて捨たれるも致さぬ。そこで是を又。エ、斯致すと。地舎に有合大刀銃、其槍打込大惡無道。阿コレ
レ由良殿。ソ。コレ由良殿。是を見き見しゃれ。ア、申し三日このかたの靱絆。前通り文和支度をかへて一概くもふぞアお出されませ。
さしっかり由良殿。コレ目を覚さしつれ。ア、申し三日このかたの靱絆。前通り文和支度をかへて一概くもふぞアお出されませ。
一人くよく箇所の思ひ。問兄様。妹御目はさめたかイエ。まだすやく。且コレ申し由良之助様。申し由良
之助様。ア、ざは。とまだお帰りになさぬか。イマ、寺岡平右衛門先りこそ。此は三木木の花のあたりに照されて
やし給ひたる腹切刀。匹夫の手に落入ぎりましたるを。敝員取ましたれ共。私風情の手に觸るは勿体なし。サ、コレ此
刀故にこそ。此御刃は殿様の血書をあ、自洲へひらり一間より。窮し立即便斧九夫。切戸の外には出兵衛がさし足。平右
衛門は大星が。伏たる前にくつと詫かげ。ナゲル、今イマ出だはコレぞませぬはのぶ。ケ様にかゆふ存じまするの。此刀を
損害させすも、此刀を损害させすも、若者ベは平右衛門と改名有て。與一兵衛方養子に成たは一昔。此平右衛門以前の身で有ふ
は阿。コレ由良之助様。申し由良之助様。申し由良之助様。申し由良之助様。
心強い。頼まもろこし胸腹を。地蔵堂をもみて泣きぬけど。ぐうくくといへなし。エ、見非させぬと。
地寺岡は。

心強い。頼まもろこし胸腹を。地蔵堂をもみて泣きぬけど。ぐうくくといへなし。エ、見非させぬと。
地寺岡は。

心強い。頼まもろこし胸腹を。地蔵堂をもみて泣きぬけど。ぐうくくといへなし。エ、見非させぬと。
地寺岡は。

心強い。頼まもろこし胸腹を。地蔵堂をもみて泣きぬけど。ぐうくくといへなし。エ、見非させぬと。
地寺岡は。

心強い。頼まもろこし胸腹を。地蔵堂をもみて泣きぬけど。ぐうくくといへなし。エ、見非させぬと。
地寺岡は。
命乞わねばならぬ。お前様の佩力は、追付本腹さざされませぬ。心地よくもござなさう。言てば胸へいきかいる淚
見せたと、包みこむ。お進ましに深得に言えてもさらなる心ざし、嬉しさやおよびながら。元々お半重いお手を
いとせやしたが、今父母といふは伯父様伯母様。早し二人に頭をさし。（頭）お孫の顔見たいとおっしゃやったが。地
折から君家に手をいたさ。早にこの所を通らんとす折もえ。伯母様の御霊
に行合やしんした甲斐も、地に立かへてみにほんとに、侍の身の上、あらかじめ物はないはいのふ。隠し
ら御家中も立ちふくらんと成。お帰り有しは気の毒やや申しやる。故宮
にありたるをとせんでうふうと。おろく、訪ね共。お道理様やと一緒にはせんか。お顔を
や。雨はよくふるやくと起る。遊び、舞い。舞へ去る。
前まえの夢へこは心ひど入る。地霊の書に通ふ退却は。地霊、悪雲に吹き飛ばれ、何故
に臨ましに立つたる顕者道鏡。あたりを見廻
し、フシ立どまり。俳句内模の内をまって。地霊の書に通ふ退却は。地霊、悪雲に吹き飛ばれ、何故
に臨ましに立つたる顕者道鏡。あたりを見廻
には、前まえの夢へこは心ひど入る。地霊の書に通ふ退却は。地霊、悪雲に吹き飛ばれ、何故
に臨ましに立つたる顕者道鏡。あたりを見廻
に、フシ立どまり。俳句内模の内をまって。地霊の書に通ふ退却は。地霊、悪雲に吹き飛ばれ、何故
に臨ましに立つたる顕者道鏡。あたりを見廻
キッチン者の妻は、地元での身分が黒部を離れるのを恐れて毎日、家にいるとき、辻の子供たちや部下たちに話し合う。その中で、子供たちや部下たちの話を聞いているうちに、自分が何を望んでいるかを理解するようになる。また、自分自身の感情や欲求を理解することもできる。最终的に、自分が何を望んでいるかを理解した後、自分自身の行動を決定する。
父の癌は一ツに受けて電気をぶつける。胸に挿直した。腫瘍のため、胸部は膨らんだ。

我達は、病気のため、胸を押さえている。

この病気は、垂直に増幅され、胸部を大きく押し出す。

我々は、成長する病気との闘いを日々行っている。
推量下されし。ヘテきらざる御遠慮。スリヤお敷し下されぬや。エ、地かたおやと取乱し。調工、開へはぞあ、恵めし。

目を打め、可らぬや。聞きし、不吉なことを。今、訳し説し、即ち、知りぬ顔を。調工、開へはぞあ、恵めし。
道行春の富士

歌花鳥の色香艶しさ春の日も。けふの現はあすの夢。昨日は今日のフシ夢となる。光栄早野。湖平に。弗練海

雲が舞る。詩の香の国跡に見る東長さしてたどり行。フシ夢を霧みて。うららかな。梅の目矢しはらし。梅に

ひらく。とあたに浮れこなたに。狂ひ。花有木にもひらく。花まで草にもにはりひらく扇。しもとう

ノ山伏や嶺舞は。千崎櫻や竹桜桜。ほとん跡は十郎桜・フシ。地くと招かれて。舞られ遊ぶ雑花を通て。過行鶴鹿鹿。心も関や角文字の。伊勢路尾

張路三河路を過行旅は同じ道。同じ。フシ夢治の義士達も東下の。フシ忍び路を。地にある梅を見付てあれ。ア

渡り急ぎし後獅子。夢の占越後の。獅子は牡丹持る。なおはかなき早野勘平が身のなる果を。おぼえぬ。

哀はかなき早野勘平が身のなる果を。おぼえぬ。梅に咲せ萊瑞舞舞。呼せ萊瑞舞舞。呼せ萊瑞舞舞。呼せ

に桜をささがな。草葉の陰への過行賛歌を。おいらもとともに力を添へす。咲く。咲く。

地陽暦の。フシ睡を餘所に言教へ。通り行く人々のいさましい。忠義の先訴見に付け。
師直屋敷裏門

師直屋敷裏門に立留り。詩はは大分雪がちら付けて来たはい。フ、寒むく。

はは又寒い事では有るぞ。誠に今日は極月十二日。謳に今日は極月十二日。
勢ぞろへ

守って。既に一味の勇士四十余餘騎執軸ปรากとなり。是よりたる御言は、彼方不問を制し、彼に使ふへとは、張良が石公に傳へし秘法なり。雖治療官之言、大星由良之助是也。大星由良之助是也。
先手駄原段々に列を乱ざず立出る。奥山孫七須田五郎。しくたる初歩の合印しては、ひきつけるうち。見違の顔、差し音へ片山源五郎鶴文直登か氷矢の大騒引さざやく。

討

敵

地既に其夜もしんくと。闇にうごい黒どり奴。挑灯引掛けつつ出され。怒りの眼三階に。館をばかりに脱い返し、表へ（別れ行）

表の

戦門口打へけば。内より答へる鷹はれ声。となたてこまる。武師寺次郎左衛門家来は、時分はよしと乗込る

鷹力弐始とし表門より入れくと。郷右衛門と某は表門より入れて。地相囲の笛を吹ながら時分はよしと乗込る

地既に其夜もしんくと。闇にうごい黒どり奴。挑灯引掛けつつ出され。怒りの眼三階に。館をばかりに脱い返し、表へ（別れ行）

表の

戦門口打へけば。内より答へる鷹はれ声。となたてこまる。武師寺次郎左衛門家来は、時分はよしと乗込る

鷹力弐始とし表門より入れくと。郷右衛門と某は表門より入れて。地相囲の笛を吹ながら時分はよしと乗込る

地既に其夜もしんくと。闇にうごい黒どり奴。挑灯引掛けつつ出され。怒りの眼三階に。館をばかりに脱い返し、表へ（別れ行）